古文書近世史料目録

第 11 号

村山市楯岡 最上徳内史料

昭和53年 7 月

山形大学附属博物館

凡　　例

1. 本目録は，村山市楯岡出身で，最上徳内研究家であった故皆川新作氏が，調査・研究・収集した史料を，嫡嗣の皆川健次郎氏（東京都在住）が，昭和42年６月，当館に寄贈された。それを整理・分類し，目録化したものである。
2. 本資料は，故皆川新作氏が，最上徳内の伝記ならびに著作集刊行を計画し，長年に亘って調査・研究した筆写本・草稿・ノート類が主である。
3. 最上徳内の著書及び作製地図は，学術研究上貴重なものが多く，それが未刊のまま，各地の公的施設に所蔵されている現状にかんがみ，これを丹念に筆写又はノート化したこの研究資料は，今後の最上徳内研究に，便益を与えるものと思われる。
4. 本目録の分類は，次のように五つの部門に類別し，さらに各部門のそれぞれの項目に番号を付した。

(1) 最上徳内著述の写本
(2) 最上徳内研究原稿及びノート類
(3) 最上徳内研究関係地図
(4) 最上徳内研究参考文献
(5) 雑　　録

5. 巻末に最上徳内略年譜と主要著述略解及び，本資料を収集した故皆川新作氏の略歴を添えて参考の一助とした。
6. 本目録の作製にあたっては，皆川新作氏著「最上徳内」（昭和18年10月）及び島谷良吉著「最上徳内」（昭和52年８月）の両書を参照した。

番号	表題		年代	備考

(一) 最上徳内著書の写本

1	赤蝦夷風説考		天明8・正	最上徳内著・本多利明訂未刊
2	赤人問答例			
3	蝦夷草紙	巻之一	寛政2・9	刊本　松前の風土
4	〃	巻之二	〃	〃　蝦夷地の風土
5	〃	巻之三	〃	〃　島々並異国の風土
6	〃	後篇	〃 12・	〃　3巻より成る
7	〃	別録		
8	蝦夷拾遺			刊本「北門叢書」所収
9	東蝦夷地松前より道中日記 アッケシまで			未刊
10	松前史略		文化8・	2巻・東京大学蔵
11	最上徳内より申上			未刊
12	最上常矩厚岸乱申上			〃
13	線上載図　整数術		天明4・	未刊
14	度量衡説統	巻之一	文化元・正	6巻・3冊 「日本経済叢書」所収
15	測量算策		天保3・2	徳内の門人・松尾一貫の写本が東北大に蔵さる。
16	最上徳内見行草			未刊
17	蝦夷方言藻汐草	乾	文化元・	木版刷和本　徳内　序文
18	〃	坤	〃	〃
19	論語彝訓一	(巻の首)	文政元6	24巻・自筆稿本は国学院大学蔵
20	〃　二	(学而篇)		
21	〃　三	(為政篇)		
22	〃　四	(八佾篇)		

番号	表題	年代	備考
23	論語彝訓五（里仁篇）		
24	〃　六（公治長篇）		
25	〃　七（雍也篇）		
26	〃　八（述而篇）		
27	〃　九（泰伯篇）		
28	〃　十（子罕篇）		
29	〃　十一（郷党篇）		
30	〃　十二（先進篇）		
31	〃　十三（顔淵篇）		
32	〃　十四（子路篇）		
33	〃　十五（憲問篇）		
34	〃　十六（衛霊公篇）		
35	〃　十七（季子篇）		
36	〃　十八（陽貨篇）		
37	〃　十九（微子篇）		
38	〃　二十（子張篇）		
39	〃　二十一（堯日篇）		
40	〃　二十二（助辞解） 二十三（孔子年表 弟子年表）		
41	孝経謹奉進　上巻	文政10・7	天保3年　日本橋・嵩山房より刊行
42	天　然　訓	文化10・10	未刊　旧東京文理科大蔵
43	傷寒雑病論解十五，十六，十七		稿本・3篇以外は散逸

(二)　最上徳内研究の草稿及びノート類

1	最上徳内（原稿）　1		昭和18年10月刊行の著書「最上徳内」の原稿・（4冊）
2	〃　〃　2		

番号	表　　題	年　代	備　　考
3	最上徳内（原稿）	3	
4	〃　（〃）	4	
5	最上徳内（原稿）	1	ノート・（4冊）
6	〃　（〃）	2	
7	〃　（〃）	3	
8	〃　（〃）	4	
9	最上徳内研究（原稿）	1	第1章～第4章
10	〃　（〃）	2	第5章～第10章
11	〃　（〃）	3	第11章～第12章
12	〃　（〃）	4	第13章～第17章
13	〃　（〃）	5	第17章～第22章
14	〃　（〃）	6	第22章～第23章
15	〃　（〃）	7	第23章～第27章
16	〃　（〃）	8	第28章
17	〃　（〃）	9	第29章～第30章
18	〃　（〃）	10	第31章～第34章
19	〃　（〃）	11	（第33章）
20	〃　（〃）	12	第35章～第36章
21	〃　（〃）	13	第36章～第38章
22	〃　（〃）	14	第38章～第42章
23	〃　（〃）	15	第43章～第45章
24	〃　（〃）	16	第46章
25	最上徳内研究（ノート）	1	最上徳内略年表　外
26	〃　（〃）	2	蝦夷紀行　外
27	〃　（〃）	3	最上徳内原籍考　外

番号	表題	年代	備考
28	最上徳内研究（ノート）	4	北海道史稿　外
29	〃（〃）	5	シーボルト・徳内伝　外
30	〃（〃）	6	シーボルト・日本交通貿易史　外
31	〃（〃）	7	伊能忠敬　外
32	〃（〃）	8	東遊記　外
33	〃（〃）	9	徳内伝記一
34	〃（〃）	10	〃　二
35	〃（〃）	11	木村謙　蝦夷日記抄
36	〃（〃）	12	徳内の書簡　外
37	〃（〃）	13	休明光記　外
38	〃（〃）	14	北海道史
39	〃（〃）	15	東遊雑記　外
40	〃（〃）	16	蝦夷地一件
41	〃（〃）	17	〃　外
42	〃（〃）	18	赤賊冦辺実記　外
43	〃（〃）	19	蝦夷譚　外
44	〃（〃）	20	北行日録抜粋　外
45	〃（〃）	21	休明光記　外
46	〃（〃）	22	樺太施政沿革　外
47	〃（〃）	23	北村山郡　郷土読本・山形県史話抜　外
48	〃（〃）	24	林子平・新井白石　外
49	〃（〃）	25	渡島筆記 蝦夷地一件　外
50	〃（〃）	26	箱館御用留　外
51	〃（〃）	27	天明時代の海外思想　外
52	〃（〃）	28	日本総図の沿革　外
53	〃（〃）	29	日本地図測量小史　外
54	〃（〃）	30	蝦夷地図　外
55	〃（〃）	31	地図年表

番号	表　　題	年　代	備　　考
56	最上徳内研究（ノート）	32	大日本地名辞書抜　外
57	〃　（　〃　）	33	度量衡考　外
58	〃　（　〃　）	34	日本数学史論　外
59	〃　（　〃　）	35	論語解題略　外
60	〃　（　〃　）	36	水戸文学叢書抜　外
61	〃　（　〃　）	37	御製儀象考成　外
62	〃　（　〃　）	38	雲上明覧　外
63	〃　（　〃　）	39	唐太日記　外
64	〃　（　〃　）	40	厚生新論　外
65	〃　（　〃　）	41	数学文化史　外
66	〃　（　〃　）	42	外国地理研究に就いて　外
67	〃　（　〃　）	43	蝦夷見聞記　外
68	〃　（　〃　）	44	バルトリド著 東洋研究史抜　外
69	〃　（　〃　）	45	蘭学者史伝抜　外
70	〃　（　〃　）	46	林子平と古川辰　外
71	〃　（　〃　）	47	白虹斎先生墓表　外
72	〃　（　〃　）	48	郡司大尉　外
73	〃　（　〃　）	49	高山彦九郎伝　外
74	〃　（　〃　）	50	東山道駅路図　外
75	〃　（　〃　）	51	大測表　巻之三　外
76	〃　（　〃　）	52	北夷談　外
77	〃　（　〃　）	53	幕末史の研究　外
78	〃　（　〃　）	54	蝦夷地回浦紀行　外
79	〃　（　〃　）	55	ヤソ会士による蝦夷地調査 に関する研究　外
80	〃　（　〃　）	56	禁書の研究　外
81	〃　（　〃　）	57	高山彦九郎　外
82	〃　（　〃　）	58	漢方医学想念に就て
83	〃　（　〃　）	59	傷寒雑病全論解　外

番号	表題	年代	備考
84	最上徳内研究（ノート）	60	東韃紀行の山丹について
85	〃 〃 （ 〃 ）	61	シーボルト夜談録　外
86	〃 （ 〃 ）	62	松前箱館日記　外
87	〃 （ 〃 ）	63	実測蝦夷地経緯度　外
88	〃 （ 〃 ）	64	西洋文化と日本　外
89	〃 （ 〃 ）	65	牢獄秘録　外
90	〃 （ 〃 ）	66	蝦夷地理史　外
91	〃 （ 〃 ）	67	アイヌ　外
92	〃 （ 〃 ）	68	磐水漫筆　外
93	〃 （ 〃 ）	69	近藤重蔵　外
94	〃 （ 〃 ）	70	蝦夷漫録　外
95	〃 （ 〃 ）	71	蝦夷樺太島之記　外
96	〃 （ 〃 ）	72	改元紀行　外
97	〃 （ 〃 ）	73	多摩二千六百年史抜
98	〃 （ 〃 ）	74	蝦夷唐太記　外
99	〃 （ 〃 ）	75	ロシア文化と函館　外
100	〃 （ 〃 ）	76	北夷談　外
101	〃 （ 〃 ）	77	蝦夷巡見録　外
102	〃 （ 〃 ）	78	ロシア人来舶記 ロシア人雑記　外
103	〃 （ 〃 ）	79	北夷紀行　外
104	〃 （ 〃 ）	80	蝦夷対問　外
105	〃 （ 〃 ）	81	渡辺華山の世界地理研究
106	〃 （ 〃 ）	82	通航一覧　外
107	〃 （ 〃 ）	83	青森県史巻二抜　外
108	〃 （ 〃 ）	84	西暦新篇　外
109	〃 （ 〃 ）	85	日本火術　外
110	〃 （ 〃 ）	86	ロシア使節所置儀　外
111	〃 （ 〃 ）	87	辺策私辨　外

番号	表　　題	年　代	備　　考
112	最上徳内研究（ノート）	88	松前蝦夷動乱写　外
113	〃　（　〃　）	89	江戸時代史抜　外
114	〃　（　〃　）	90	北羽発達史　外
115	〃　（　〃　）	91	京都近代学術史論　外
116	〃　（　〃　）	92	ロシア志　外
117	〃　（　〃　）	93	論語年譜抜
118	〃　（　〃　）	94	〃
119	〃　（　〃　）	95	間叟蝦夷談
120	〃　（　〃　）	96	魯論　外
121	〃　（　〃　）	97	酔古館師友書簡集
122	最上徳内の研究（ノート）		徳内の伝記 シーボルト事件　外
123	最上徳内研究ノート		徳内関係文献目録　外
124	最上徳内全集（原稿ノート）	1	蝦夷風俗人情之沙汰　外
125	〃　（　〃　）	2	蝦夷草紙別録　外
126	〃　（　〃　）	3	松前史略
127	〃　（　〃　）	4	度量衡説統
128	〃　（　〃　）	5	学初堅碩　・天然訓
129	〃　（　〃　）	6	孝経謹奉進・孝経白天章
130	〃　（　〃　）	7	耕外抄　外
131	〃　（　〃　）	8	貨　鑑
132	〃　（　〃　）	9	平松基子歌集
133	松前史略の研究		原　稿
134	最上徳内略伝		〃

番号	表　　題	年　代	備　　考
135	最上徳内の胆力について		原　稿
136	最上徳内　地理学上の貢献		〃
137	蝦夷地の研究（原稿）	1	蝦夷草紙著述の由来　外
138	〃　（〃）	2	松前総論　外
139	〃　（〃）	3	ヲムシヤ　外
140	〃　（〃）	4	チュクチ
141	〃　（〃）	5	ヨウマンデ　外
142	〃　（〃）	6	物　産
143	〃　（〃）	7	南部漂人伝
144	〃　（〃）	8	蝦夷地報告書
145	〃　（〃）	9	海上里程並交易
146	〃　（〃）	10	唐　太
147	〃　（〃）	11	大　河
148	〃　（〃）	12	エトロフ島・ウルップ島
149	〃　（〃）	13	山丹・山丹の言葉
150	〃　（〃）	14	カムチャッカ
151	〃　（〃）	15	天度里数　外
152	〃　（〃）	16	異国船漂着
153	〃　（〃）	17	妻妾　外
154	〃　（〃）	18	附図解説
155	カラフト探検略史		原　稿
156	蝦夷談聞記		〃

番号	表　　題	年　代	備　　考
157	文化4・5年蝦夷地警備		原　稿
158	最上徳内研究資料（原稿）1		ラックスマン渡来
159	〃　（〃）2		ロシアの東方侵略
160	〃　（〃）3		西蝦夷地場所扣
161	〃　（〃）4		蝦夷地経営
162	〃　（〃）5		辺要分界図考の満州文書
163	〃　（〃）6		蝦夷地地図解説
164	〃　（書写）		満州書札
165	論語𠮟訓解説		原　稿
166	論語𠮟訓抜書		〃
167	論語𠮟訓（巻の首）		ノート
168	論語研究		ノート
169	〃		〃
170	孝経謹奉進研究　1		ノート
171	〃　2		
172	〃　3		
173	孝経白天章		原　稿
174	度量衡説統研究		ノート
175	最上徳内研究資料収録		ノート

番号	表　　題	年　代	備　　考
176	最上徳内研究資料収録		筆写（合綴）
177	ロシア人（赤人）風俗図		模　写

(三)　最上徳内研究関係地図

1	蝦夷之図		東京大図書館蔵地図を筆写せしもの
2	千島全図（ロシア名入り）		
3	エトロフ島全図		東京大図書館蔵地図を筆写せしもの
4	猟虎島之図		〃
5	唐太島之図		〃
6	国後・擇捉島之図		模　写
7	寛政11年東蝦夷石川左近将監廻島場所道法附絵図	天保3・8	借　写
8	青森県・渡嶋半島部分地図		印刷地勢図（100万分の1）
9	北海道中央部地図		〃
10	エトロフ島南部・国後島・根室地方部分地図		〃
11	エトロフ島北部・ウルップ島南部地図		〃
12	ウルップ島北部・シムシル島地図		〃
13	樺太南部地図		〃
14	樺太及び沿海州地図	明治38・8	東雲堂発行（125万分の1）
15	樺太・北海道地方地勢交通図	不　明	印刷・（120万分の1

(四)　最上徳内研究参考文献

1	桑韓筆語	宝暦14・正	ノート　山田図南著
2	古文孝経標註	明和9・3	木版刷・和本 片山兼山標註

番号	表　　題	年　代	備　　考
3	蝦夷日記巻八抜書	天明6・3	筆写　山崎半蔵筆
4	紫　奥　略　談	天明8・5	〃　青島俊蔵著
5	神壁算法巻之上	寛政元・3	木版刷・和本　藤田嘉言著
6	〃　巻之下	〃	〃
7	松前詰合被仰付一条記録	文化4・	写本　斎藤勝利所有
8	西蝦夷地日記	文化4・8	ノート　田草川伝次郎
9	六分円器　量地手引草	嘉永6・9	本版刷・和本　村田如訥編
10	シーボルト資料展覧会出品目録	昭和10・4	冊　子
11	日独文化講演集（シーボルト記念号）	昭和10・10	〃
12	松前一乱実録	昭和12・1	筆者・和綴
13	北海開拓鼻祖　最上徳内	昭和12・3	〃　伊藤　豫編
14	最上徳内数学上之貢献	昭和15・8	冊子　大木善太郎著
15	蝦夷探検家　最上徳内　外		筆写・冊子
16	神壁算法巻之下　外		ノート
17	本朝度量衡考		ノート　狩野智之著
18	幕末蘭学者略伝		冊　子
19	間宮林蔵の人物		冊子　赤羽壮造
20	論語集中（巻之七）		木版刷・中国本
21	〃　（巻之九）		〃
22	満漢字清文啓蒙　外		ノート
23	ロシア本紀略草稿巻二		ノート　前野　熹訳
24	函館行軍記		冊子・荘内藩用人 杉村翁助遺稿
25	近世日本国民史　雄藩篇		ノート
26	「大学」に現われた経済思想	大正15・3	抜　刷 (経済論叢第22巻第3号)
27	論語ゼミナール		プリント
28	四　書　解　題		ノート

番号	表　　題	年　代	備　　考

(五)　雑　　録

1	最上徳内研究来翰控	合　綴	
2	「最上徳内」贈呈に対する礼状	〃	
3	補筆訂正の付箋	一括・袋入	

主　要　著　述　解　説

後篇3巻は，日本人吏員として，ウルップ島に最初に上陸し，最初にロシア人に会った最上徳内のロシア人との対談記や，わが国海岸に近づこうとしているロシア人のこと，蝦夷地と山丹・満州との往復のこと，幕吏がアイヌの不満・反抗にどう対処しているかなどについて記している。

2. 蝦夷草紙別録

これは，つぎの6冊から成っている。

(1) 蝦夷地収納運上金帳

(2) 諸役運上金帳

(3) 蝦夷地交易値段付表

(4) カラフト人交易値段付表

(5) 松前交易値段付表

(6) 船出入大凡帳

数字から見た松前経済資料である。天明6年と8年の銘記があるから，この頃に於ける，松前の政治・経済状況を知る，唯一の貴重な資料である。

蝦夷草紙の史料的価値は，当時は勿論，今日においても，少しも揺がず，益々高く評価されている。

(1) 当時にあっては，蝦夷地について無知であった幕府当局の眼をさまさせ，北方領土については，幕府が直接支配権を掌握して，問題を解決すべきであるとの意見を天下に公表し，その批判を求めた，最初の貴重書である。

(2) また，この著書の中にある，徳内が採集した「蝦夷語」は,シーボルトを通じて，オーストリアのフィッツマイヤー教授に伝えられ，さらに，ここからドイツのラッツェル教授の「人類史」（全三冊）各巻にアイヌのことが記述されるに至った。

これが発展して，イギリスのバチュラーが，「アイヌの父」となることを志して，わが国に来朝し，その保護に，熱意と使命感をもって当った。

この意味で，「蝦夷草紙」は，わが国文化人類学の第一書であり，わが国における北方学の第一の原書である。

(3) 現代では，北方問題の史的原点を，十分に把握させる,重要文献であるため，

徳内は，役人・探検家であると共に，学者・研究家でもあり，御用役中も研究や執筆をつづけ，各方面に亘る著作が豊富である。その内の主要著作二，三について略解説を試みたい。

1. 蝦　夷　草　紙

この著作は，寛政２年９月中旬に，同年６月に書いた「蝦夷風俗人情の沙汰」を改訂したもので，正篇・後篇各３巻ずつ６巻から成っている。

内容は，松前・蝦夷地（現北海道）および千島・カラフトならびにシベリア・満州などに関する，徳内自身の実地見分知識や聞き知った事柄を，巨細となく書き記し，世人が今まで，見過じていた，日本北地の存在を，広く知らせるために書いた，警世啓蒙の書である。

昭和18年の半ば頃，刊本となって世に出るまでは，写本で伝えられ，特に幕府から蝦夷地役人として派遣される士人などは，これを手写し，予備知識用として必携したと言われる。

その構成は次のとおりである。

正　篇 寛政２年（1790） 後半の著述	巻一	松前風土の記，15条 列藩の一つである松前藩について述べたもの。
	巻二	蝦夷地風土の記，18条 東蝦夷地で，実際の観察した地勢・気候・産物・アイヌ風俗・言語などについて記している。
	巻三	島々並異国風土の記 徳内とアイヌの酋長イジョイとの対談を記したもの。千島諸島・カムチャッカ・東シベリアの自然地理を述べている。

後　篇 寛政12年（1800） 初の著述	巻一	赤人占居並行動の記，５条
	巻二	山丹満州と松前蝦夷交渉記，７条
	巻三	幕吏の蝦夷人処遇の記，７条

その国家的貢献は，実に大きいと言わざるを得ない。

3. 度量衡説統

この書は，中国古来の度量衡制を，史書によって，考証論究し，わが国の度量衡と比較研究したもので，徳内の数学関係の著作としては，唯一のものである。6巻3冊から成り，文化元年（1804）正月，東都書屋，須原屋新兵衛・同善五郎名で発行している。中国及び日本の度量衡を考証するには，必要欠くべからざるものとして，学者間に珍重された。序文を書いた，山本北山（江戸後期の折衷学派の儒者で，経済のほか，詩文をよくし，医卜・天文・経済にも通じた。）も，その考証が厳密で，しかも説明が簡潔明截な稀書として，激賞している。

唯，惜しいことには，全巻漢文による記述であるため，現代ばかりでなく，江戸時代にも難解であったと思われる欠点がある。

4. 論語彝訓

この著作は，文化元年（1804）初めに着手し，約15年の歳月を費して，文政元年（1818）6月に完稿した，全23巻の大作で，徳内独自の研究書である。

さらに，文政9年（1826），附録として「詩文押韻策」を著作したため，全巻揃えで24巻となる。

内，出版されたのは，「巻之首」と「詩文押韻策」（文政8・9年頃）の二巻で，他は原稿のまま残った。それは，現在，国学院大学に所蔵されている。

書名の彝訓とは，人の常に守るべき教訓の意だから「論語」をもって，生活の常道とするという意味である。

普通，「論語」本文の解釈は，誰でも行うことだが，徳内の意図するところは，論語の正しい訓読，正しい解釈をすることであったから，単に，これまでの儒学者の訓詁・註釈の踏襲に満足せず，彼独自の研究を行った。

もともと，論語の研究には，古文・今文の説があり，古文は，秦の始皇帝のと

き，焚書の禍で亡失したものであるから，今文は，それの偽作論語だと言われている。

そして，今文論語を集大成したのは朱子学派である。わが国では，この朱子学派に反対する一派を，古学派といった。山鹿素行（古学）にはじまり，伊藤仁斎（古義学）・荻生徂来（古文辞学）などがこの派に属した。徳内は，これらの学派に共鳴した一人であったが，さればと言って，全面的に彼等に共鳴したのでなく，彼独自に，孔子の真実なる人格，論語の真義を把握しようとしたものである。

すなわち，この書は，徳内の独創的な研究法を窺うことが出来る書である。

内容はつぎの通りである。

巻之首		一巻
論語全		二十巻
助辞解		一巻
孔子系譜	合せて	一巻
孔子年表		
弟子年表		
附録　詩文押韻策		一巻
	合計	二十四巻

5. 天然訓（又は自然訓）

この書は，徳内の著書としては，異例の書である。

内容は，鮟鱇訓・蝙蝠訓・蜜蜂訓・石豆訓・漂流訓・河豚訓・饑飢訓の七篇かから成る，小冊子の寓話書で，全部漢文体である。

八王子宿に在勤中，土地の学者，塩野適斎に見せたところ，大いに賞賛し，これに序文を寄せた。彼はその序文で，この書は，庶民の蒙を聞く，日常生活における人訓書であると評価している。

この書は，徳内が府外出張中，すなわち，北は蝦夷地から，南は九州日向まで，勤役巡見の際に成稿したものと思われる。話そのものは，その実体を知る人ならば，誰でも理解し得るが，寓意を述べることは，識者にして初めてなしうることで，ここに，徳内の人格・識見・思想を窺い知ることが出来る。

最上徳内略年譜

宝暦5年　(1755)　　1歳

最上徳内生る。(本名高宮常矩・幼名元吉)

安永9年　(1780)　　26歳

正月　父，病死。

天明元年　(1781)　　27歳

江戸に登る。幕府の医官，山田図南(宗俊)の家僕として住込み，医学を学ぶ。

天明2年　(1782)　　28歳

湯島の数学者，永井正峯の門に入り，数学を学ぶ。

天明3年　(1783)　　29歳

本多利明の〝音羽塾〟に入り，天文・地理・航海術を学ぶ。

天明4年　(1784)　　30歳

3月25日　師，永井正峯と算額修業に出発。但し，品川駅で，永井先生急病のため引返し，算額修業は中止となった。

(10月21日　老中田沼意次，蝦夷地見分隊派遣を決定ー勘定奉行・松本秀持の提案)

天明5年　(1785)　　31歳

2月中旬　見分隊江戸出発。徳内は，師，本多利明の代理として，青島俊蔵の従者となり参加。

3月中旬　松前着(第一回渡海)

4月29日　徳内は，東蝦夷地見分隊(山口鉄五郎・青島俊蔵・大石逸平)

の一員として松前出発。

8月中旬　徳内と大石は，クナシリ島の南端オトシルベに着き，さらに西岸を回って，北端のアトイヤに達した。

9月　前途の困難を思い，根室に帰り，冬期間は松前に滞留。

天明6年　(1786)　**32歳**

正月24日　徳内単身松前出発。

2月下旬　厚岸着。

3月10日　酋長，イコトイの舟で厚岸出帆。

3月20日　クナシリ島上陸。さらに，東岸沿いを北進，イショヤを経て，北端のアトイヤに達した。

4月18日　エトロフ島南端のベルタルベに着く。

5月4日　北内保着。この地の酋長ハウシビからロシア人（赤人）の情報を得た。

5月5日　シャルシャム（藻取）着。この地で，徳内はじめてロシア人3人に逢う。

頭　主	イシュヨ	(32歳)
次　役	サスノスコイ	(28歳)
下　僕	ニケタ	(28歳)

5月下旬　ロシア人3人を連れて，クナシリ島へ逆航。

6月下旬　徳内はロシア人を同島に残し，再びエトロフ島に向かい，北端のアトイヤに達した。

7月　さらに北航，ウルップ島に上陸，東北端のヲタンモイに達した。

8月上旬　ウルップ島を一周し，ロシア人の不在を確認して，クナシリ島に帰った。

（8月　田沼意次　老中を罷免さる。）

9月　徳内厚岸着。

（9月8日　将軍家治没 — 51歳）

（12月15日　松平定信老中となり，田沼派は排斥され，蝦夷地開発事業は中止となった。）

12月末　青島俊蔵・最上徳内江戸に帰る。

天明7年　（1787）　**33歳**

4月　大陸渡航を志し，江戸を出発。

7月　松前に上陸（第二回渡海）
松前藩から入国を拒否され，逆航して野辺地に帰り，船頭新七宅に滞在し，算術・読書を講じた。

天明8年　（1788）　**34歳**

野辺地廻船問屋，島谷清吉（襲名して清四郎）の妹ふで

（19歳）と結婚。

（6月　　田沼意次没 ― 70歳）

寛政元年　（1789）　34歳

5月　　クナシリ島のアイヌが一揆を起した。
幕府，クナシリ騒動真相糺明のため，青島俊蔵を派遣。

7月15日　徳内，青島の随員として松前に渡る。（第三回渡海）

8月下旬　徳内，東蝦夷を廻って，アイヌと問答し，騒動の真相を確かめて，松前に帰る。後，妻子を野辺地に残したまま，青島と共に帰府。青島宅に同居。

寛政2年　（1790）　36歳

正月23日　青島俊蔵事件（幕府への報告書不正事件）に連座して入牢。

5月1日　徳内出牢を命ぜられ，本多利明へ仮預けとなる。

8月3日　判決下り，徳内は無罪となる。
（青島は，遠島申付けられ，8月5日，八丈島へ流罪の命が伝えられたが，出帆前，8月17日牢屋で病死した。

8月中　　松平定信に抜擢され，普請役下役（10俵1人扶持）に取立てられ，12月普請役（30俵2人扶持）に昇進。

10月　　妻ふで出府。江戸で家庭生活はじまる。

12月22日　蝦夷地御用を仰せ付かり，29日江戸を発つ。

寛政3年　(1791)　　**37歳**

正月24日　松前に上陸（第四回渡海）

2月11日　東蝦夷地へ出発。

4月3日　クナシリ島上陸。同16日エトロフ島上陸。5月4日西岸のシャルシャム到達。

5月13日　ウルップ島上陸。6月3日同島北端着。

7月　アッケシへ帰る。アッケシの交易状況を視察。神明社建立。

11月4日　松前へ帰る。12月22日江戸へ帰府。

寛政4年　(1792)　　**38歳**

正月22日　西蝦夷地交易御用及びカラフト見分を命ぜられる。

2月6日　江戸発。閏2月10日松前到着（第五回渡海）

3月7日　松前出帆。4月宗谷着。

4月上旬　カラフト島白主に上陸。（樺太探検第一回目）

5月25日　クシュンナイ（久春内－北緯48°強）到着。
徳内はここで山丹人来島の通路を調査した。

6月20日　クシュンナイ滞在20日位で帰路に着く。

10月初頃　松前帰着。

寛政5年　(1793)　　39歳

正月28日　江戸帰着。

(7月23日　定信老中を辞任)

寛政6年　(1794)　　40歳

寛政7年　(1795)　　41歳

寛政8年　(1796)　　42歳

11月18日　多年の功労により，市ケ谷甲良敷（牛込柳町）裏に，78坪の宅地を賜わる。

寛政9年　(1797)　　43歳

材木御用掛として駿州・焼津浜に出張滞在す。

寛政10年　(1798)　　44歳

5月20日　御用材出役中の徳内に，蝦夷地巡察命令下り，江戸を出発。本隊（近藤重蔵－24歳）は，既に，4月15日江戸を出発，5月16日松前に着いている。

6月16日　松前着（第六回渡海）

6月22日　近藤重蔵に追付かんと，松前を出発。

7月25日　クナシリ島にて，近藤重蔵の一行に加わる。

7月27日　エトロフ海峡を越えて，エトロフ島南端ベレタルベに着く。

7月28日　同島リコップ岩附近に「大日本恵登呂府」の標柱を建てた。

8月1日　クナシリ島アトイヤに帰る。

8月26日　同島トマリ発航。同日中ノツケに帰る。

9月15日　厚岸神明社再建。25日釧路泊。

10月21日　松前帰着。24日松前発。

11月17日　江戸帰着。北方関係者を歴訪，報告と意見を具申した。

寛政11年　(1799)　**45歳**（この年松前藩の東蝦夷地を幕府の直轄地として，支配した。）

正月　東蝦夷開発員を命ぜられ，特に道路掛となる。

2月16日　先発隊として江戸を出発。（開発隊一行は3月20日江戸出発）

4月24日　松前着（第七回渡海）
（開発隊は，4月29日松前着）

5月8日　道路工事着手（様似山道・猿留山道等）

6月8日　道路工事視察総裁，松平忠明と意見衝突し免職となる。

10月中旬　江戸へ帰る。

寛政12年　(1800)　**46歳**

正月　材木御用掛で遠州に出張。6月下旬帰府。著作「蝦夷草紙」後篇成稿（3巻）

7月　　再び材木御用掛で日向に出張。

享和元年　(1801)　　47歳

3月5日　日向より帰府。

享和2年　(1802)　　48歳

秋　　官材伐出し御用で八王子村へ出張。

享和3年　(1803)　　49歳

7月　　八王子より帰府。

文化元年　(1804)　　50歳

3月　　「度量衡説統」6巻3冊，刊行

沿海検察を命ぜられ，東海道11州の沿海を巡廻す。

文化2年　(1805)　　51歳

3月15日　幕府目付遠山金四郎の随員となり，蝦夷地派遣を命ぜられる。
(第八回渡海)
この年松前に越冬する。

文化3年　(1806)　　52歳

3月16日　遠山一行と西蝦夷見分に出発。徳内案内役をつとめる。

5月11日　宗谷着。6月22日一行と共に箱館着。

8月12日　江戸帰着。

10月　　普請役元締格に昇進（高50俵・3人扶持）この月，常陸・陸

奥・出羽各海辺廻浦御用となる。

文化 4 年　(1807)　　**53歳**

2 月　　奥羽の東西海岸を巡検。

2 月18日　吹浦泊。20日酒田泊。

〃 28日　尾花沢着。銀山視察。

3 月初　　公用終り，途中，郷里楯岡に立寄り，老母・親戚・郷党に面会し，亡父の墓参をした。

3 月中旬　帰府。

4 月27日　松前奉行支配調役並となる（高 100 俵・7 人扶持）

5 月21日　江戸出発。

6 月24日　松前着（第九回渡海）

7 月　　シャリ詰を命ぜらる。

文化 5 年　(1808)　　**54歳**

2 月14日　カラフト詰を命ぜらる。29日宗谷着。

4 月 1 日　白主着（樺太探検第二回目）

4 月 5 日　クシュンコタン（大泊）着。

6 月11日　内陸部視察に出発（能登呂半島東西海岸から真岡附近まで達した。）

7月8日　白主から会津浜帰還船で宗谷に帰る。

（翌9日）引続き，同船で帰る途中，大暴風に逢い，秋田港に漂着（同月19日）

7月末　弘前を経て，松前に帰着。

江差詰を命ぜられ越年す。

文化6年（1809）　**55歳**

引続き蝦夷地に勤務。

文化7年（1810）　**56歳**

10月　帰府（蝦夷地在勤約4カ年）

10月13日　御簾中御広敷添番を命ぜらる。

文化8年（1811）　**57歳**

文化9年（1812）　**58歳**

10月　八王子郷へ出張を命ぜられ，材木及び製蠟御用掛（監督）に従事す。この間，武・甲・相の三郡を廻村・調査した。

（この勤，文政7年まで約12年間続く。）

文化10年（1813）　**59歳**

八王子で「天然訓」成る。

文化11年（1814）　**60歳**

文化12年　(1815)　　61歳

10月　　楯岡の生母病没（享年80歳）

公務出張のため葬儀に参列出来ず。

文化13年　(1816)　　62歳

12月24日　義兄，島谷清吉病没（享年76歳）

公務出張のため葬儀に参列出来ず。

文化14年　(1817)　　63歳

文政元年　(1818)　　64歳

文政 2 年　(1819)　　65歳

文政 3 年　(1820)　　66歳

文政 4 年　(1821)　　67歳

3 月16日　恩師，本多利明病没（享年78歳）

文政 5 年　(1822)　　68歳

文政 6 年　(1823)　　69歳

7 月　　ドイツ人シーボルト，オランダ商館医として来朝。年27歳）

文政 7 年　(1824)　　70歳

製蠟監督を八王子代官に引継いで帰府。

12月14日　公職を辞し，家督を效之進（22歳）に譲る。效之進，父の御簾中御広敷添番を継ぐ。

文政 8 年　(1825)　　71歳

この頃より平田篤胤との交際はじまる。

文政 9 年　(1826)　　72歳

3 月10日（陽暦 4 月16日）　江戸に参勤したシーボルト（30歳）を訪問。徳内は，蝦夷事情の質疑に応答し，作製した「日本北方地図」を黙秘の約束で貸与した。

3 月15日　シーボルトと「蝦夷語辞典」の編さをはじめた。

4 月12日（陽暦 5 月18日）　シーボルト江戸辞去。
（シーボルトの江戸滞在期間は37日間）

4 月15日（陽暦 5 月21日）　シーボルトを小田原まで見送り，山崎の三枚橋で，再会困難を述べ，萬感胸を抑えて別れる。

この年に平田篤胤を11回訪問した。

文政10年　(1827)　　73歳

平田篤胤を訪問すること 9 回。

文政11年　(1828)　　74歳

平田篤胤を訪問すること 5 回。

（12月　　シーボルト事件 ― 幕府シーボルトを出島に幽閉し，高橋景保外38名を投獄）

文政12年　(1829)　　75歳

（9 月　　幕府，シーボルトを国外追放。12月，離日。）

天保元年　(1830)　　76歳

天保 2 年　(1831)　　77歳

天保 3 年　(1832)　　78歳

天保 4 年　(1833)　　79歳

天保 5 年　(1834)　　80歳

長男，效之進襲名して〝徳内〟と称し，徳内は〝須麻雄〟と改名した。

天保 6 年　(1835)　　81歳

6 月　　長男，效之進病没（享年33歳）

天保 7 年　(1836)　　82歳

9 月 5 日（陽暦10月14日）　徳内病没。

埋葬地　（現）文京区本郷駒込蓬莱町　蓮光寺。

戒　名　「最光院殿日誉虹徹居士」

天保11年　(1840)

6 月26日（陽暦 7 月24日）　徳内夫人ふで病没（享年71歳）

埋葬地は亡夫と同じ。

戒　名　「至光院勢誉香厳大姉」

明治44年　(1911)

8 月　　特旨を以て正五位を贈らる。

皆川新作略歴

明治10年　(1877)

1月10日　山形県北村山郡楯岡村3764番地に生る。

父喜助，母タケ，8男1女の中の4男。家は農家を営む。

明治21年　(1888)

8月1日　北村山郡楯岡高等尋常小学校，尋常小学科卒業。

明治25年　(1892)

6月20日　同校，高等小学科卒業。

明治26年　(1893)

11月22日　同校，授業雇となる。

明治31年　(1898)

3月26日　山形県尋常師範学校卒業。

4月15日　楯岡尋常高等小学校訓導。

明治37年　(1904)

3月31日　東京高等師範学校英語部卒業。

4月7日　福島県師範学校教諭。

大正6年　(1917)

5月10日　福島県立会津高等女学校教諭。

大正7年　(1918)

3月25日　福島県立磐城高等女学校校長。

大正11年　(1922)

3月31日　同校退職。

4月1日　鉄道省名古屋鉄道局教習所講師。

大正14年　(1925)

5月16日　東京鉄道局教習所講師。

昭和4年　(1929)

この頃，ジョージ・スティブンソンの伝記を研究する。

昭和7年　(1932)

4月1日　東京鉄道中学教諭。

昭和9年　(1934)

この年の夏より，最上徳内の研究始める。

昭和10年　(1935)

「最上徳内の蝦夷地探検」を「伝記」(2巻8号)に発表。

昭和11年　(1936)

「最上徳内略伝」と「最上徳内と関係ある主ある人物」を発表。
(「伝記」3巻9号)

昭和12年　(1937)

3月31日　東京鉄道中学を退職。

昭和15年　(1940)

「村上島之允の蝦夷地勤務」を「伝記」7巻4号～6号へ，
「カラフト周廻見分と最上徳内・間宮林蔵」を「伝記」7巻
10号～11号へ発表。

昭和16年　（1941）

8月25日　伝記学会編「北進日本の先駆者たち」に「近藤重蔵」「木村謙次」を執筆。

昭和18年　（1943）

「カラフト半島説とサガリン半島説」（間宮林蔵のカラフト地図作成まで）を「伝記」10巻3号に発表。

10月5日　「北辺の先覚者最上徳内」（郷土偉人伝選書3）を電通出版部より刊行。

以後，「最上徳内」（電通版）の補筆・訂正をはじめ，「最上徳内全集」編纂のため，「蝦夷草紙」「論語奪訓」等徳内の全著作の研究に晩年のすべてを尽した。

昭和32年　（1927）

1月12日　午前5時30分，風邪をこじらせ自宅（東京都杉並区阿佐ケ谷六丁目243番地 ― 現在，阿佐ケ谷北4－7－22）で永眠。（享年80歳）